

# レヴィナスにおける〈ある〉と主体の出現

浦上麻衣子

## Abstract

Levinas's notion of *il y a* is generally recognized as central to his early work. *Il y a* that appears in *De l'existence à l'existant* produces the subject as substantive. Although the subject arising from *il y a* characterizes as "one," such "one" doesn't yet qualify as "one for the other." However, that appearance of the subject contains some of the key concepts that seem necessary to understand the subject as "substitution," such as hypostasis, the instant as present, position. In this paper, I will study the use of *il y a* and the subject in *De l'existence à l'existant*, thereby clarifying what concept of the subject did Levinas initiate.

キーワード…… 〈ある〉 基体化 現在 主体

## 1 はじめに

〈ある〉[*il y a*] という概念は、レヴィナスが提示する存在概念のうちの一つであり、1946年に同名の論文で取り上げられて以来、後期の名著である『存在とは別の仕方』に至るまで、レヴィナス思想の一端を担い続けてきた概念である。本論考では、初期の代表的な著作である『実存から実存者へ』における〈ある〉の記述をもとに、〈ある〉の特徴と、そこで生じる主体の性格を明らかにする。本論考でとりあげる主体は、〈ある〉に繋ぎ止められた限りでの自己同一的な「一者」[*l'un*]であり、「他者のための一者」[*l'un-pour-l'autre*]として他者へ方向づけられた主体ではいまだない。このような主体を取り上げる理由は、レヴィナスの主体概念がこの「一者」を起点に開始されており、〈ある〉から主体が生じる過程には「他者のための一者」を理解するために必要とされる重要な契機が多く含まれているように思われるからである。よって、初期論考において論じられている主体は、「他者のため」へ転換する可能性と条件を秘めた主体であると考えられる。

## 2 実存者に先立つ実存という次元

何かの存在ではなく、存在そのものを感じるような時とは、どのような時だろう。われわれ

はおそらく、レヴィナスの言うように、世界の終わりや消滅を目の当たりにするようなとき、存在に注意を巡らすようになると思われる（*EE* p.26/39 頁）。世界の終わりとは、地球が減びるとかというような物理的な消滅だけに限られたことではない。世界は価値観の崩壊や大切な人の死によっても終わる。また、人の数だけ世界はあるという多元的な見地に立つならば、世界の終わり方はさらなる多様性を帯びてくる。世界の終わりとは、言い換えれば、馴染みのあるものを喪失することであろう。自分にとって馴染み深かったものが世界から消え去ってしまうことで、世界そのものまで急によそよそしく感じられるようになる。そのような状況下で、われわれは世界に意味を見出せなくなり、世界は無意味へと転じる。世界の終わりにおいて、「世界に対する私たちの関係の不断の作用が途切れ」（*EE* p.26/39 頁）、「存在という無名の事実」（*EE* p.26/39 頁）がわれわれに差し迫ってくる。

レヴィナスはこうした無為の存在という次元を、実存における二重性から導き出そうとしているように思われる。実存における二重性は、ハイデガーの被投性という概念を再考することから始められる。レヴィナスはハイデガーの被投性という概念について以下のように述べている。

ハイデガーには、[存在と<sup>ザイン</sup>存在者との] 区別はあっても、分離はない。[……] それにもかかわらず、ハイデガーには、普通、放擲 [déréliction] とか遺棄 [délaissement] とか訳されている被投性 [Geworfenheit] [……] という概念がある。そこで、この被投性から帰結することを強調してみることにしよう。この被投性は、(実存の……)「うちに-投げられて-ある-こと」[«fait-d'être-jeté-dans»] と訳さなければならない。あたかも、実存者は実存者に先立つ実存のうちにしか現われないかのように、実存は実存者から独立しており、実存のうちに投げられている実存者は決して実存の主人にはなり得ないかのように。まさしくそれ故にこそ、そこに遺棄と放棄とがあるのだ。こうして、われわれなしで、主体なしで生起するところの実存すること、実存者なき実存すること、という観念が明らかになる。（*TA* pp.24-25/11-13 頁）

レヴィナスは、ハイデガーもまた実存者なき実存することなどは認めないだろうが、と前提しておきながらも、被投性という概念を分析すると、「実存のうちに投げられてあること」という意味が浮かび上がってきて、実存者に先立つ実存という次元が現われると述べる<sup>1)</sup>。実存者はふだん実存の中でまどろんでいるため、この実存の次元に気づかないが、何かの拍子で分離が生じ、実存と実存者との二重性に気づくのである。

「実存者は実存する」という当たり前の事実が示すように、実存と実存者は分離することなく一体化しており、実存は実存者に従属している。実存と実存者が二重化するという事態は異常事態であるように思われるが、レヴィナスは実存と実存者の二重化を身近な経験のなかに見

出し、このような二重化という事態は日常的に経験されうることを示す。

レヴィナスは実存と実存者との二重化を、倦怠、怠惰、疲労という日常的な経験からあぶりだす<sup>2)</sup>。これらの経験は「もともと生み出されたときから拒絶の出来事としてあるもの、自らの実存にほかならない実存を前にしての後ずさり」(EE p.31/44 頁)であるとされ、こうした拒絶をとおして二重化が明らかになる。以下では拒絶において二重化がどのように現われるのかを簡単に見ていきたい。

まず、「倦怠」[lassitude] という現象が取り上げられる。倦怠の中にあるとき、何かをしなければならぬ、着手しなければならぬ、追求しなければならぬ、という解約不能の契約の責務が、避けようのない「しなければならぬ」としてのしかかってくる (EE p.31/45 頁)。

この「しなければならぬ」が、行動し着手する必要性の奥底にある魂のように現前し、その必要性を強調する。にもかかわらず倦怠は、この最終的な責務を無力に拒絶しているのだ。(EE pp.31-32/45 頁)

つまり、倦怠とは「しなければならぬ」という責務の拒絶なのだが、その根底には「存在しなければならぬ」がある (EE p.41/55 頁)。このことから、倦怠とは「実存そのものに向けられた拒絶」(EE p.31/45 頁)であるとされ、倦怠は「実存することの拒絶という現象が果たされる形式そのもの」(EE p.32/46 頁)であるとされる。「拒絶は倦怠のなかにある」(EE p.32/46 頁)。倦怠においては、実存することの拒絶によって実存者に先立つ実存という次元が明らかになる。

次に、「怠惰」[paresse] という現象が取り上げられる。怠惰は、実行するのにさほど困難をともなわないような行為と、それを実際に行なうということとの間に位置づけられる。『実存から実存者へ』では、例として起き上がることがあげられており、怠惰は、起き上がらなければならないという義務と起き上がるという行為とのあいだに位置づけられている<sup>3)</sup>。レヴィナスは怠惰が行為の開始に結びつけられている点を強調し (EE p.33/47 頁)、怠惰とは行為の開始の不可能性であると述べる (EE p.34/48 頁)。

怠惰において行為の開始の足枷となるものとは何か。レヴィナスは、行為は存在への登録であると述べる (EE p.37/51 頁)。一度始めてしまった行為は存在へ書き込まれてしまい、取り消すことができない。人が起き上がれば、起き上がることは存在する。また、人は起き上がることで起き上がることに帰属する。

行為の運動は、目的に向かうと同時にみずからの出発点の方へと屈折し、そのことによってこの運動は存在すると同時にみずからを所有する (EE p.36/50 頁)

このように行為の始まりには、存在と所有が含まれている。怠惰とは、「行為を前にしての後ずさり」、「実存を前にしてのためらい」、「実存することをおっくうがること」である（*EE* p.37/51 頁）。すなわち、怠惰は、実存を請け負うことの拒否、所有することの拒否、専心することの拒否である（*EE* p.38/53-54 頁）。このように、怠惰においても、倦怠におけるのと同様に、実存することの拒否を通じて実存者なき実存という次元が浮上するが、怠惰においてはさらに進んで、実存は重荷となって現われる（*EE* p.38/54 頁）。

最後に、「疲労」[fatigue] という現象が取り上げられる<sup>4)</sup>。疲労における実存者の分離は、「脱臼」[luxation] として説明される。

もはや自己に従わず、自己からはずされて——自我の自己に対する脱臼において——瞬間のなかで自己に重なることができないうまお永久に瞬間に絡めとられている、そんな一存在の孤独（*EE* p.50/66 頁）

倦怠や怠惰と異なり、疲労においてはすでに行為は始められている。疲労において実存者は行為のさなかにありながら、行為を拒否している。それは実存者が実存することに疲れてついていくことができなくなり、実存することに遅れてしまう状態であると言える。言うなれば、疲労とは、あたかも脱臼を起こしたときのように、実存者が実存からずれることだ。疲労とはこの「ずれ」[d calage] なのだ。脱臼した状態というのは、関節部分の骨がはずれたり、ずれたりするだけで、基本的にはまわりの筋肉や腱などは繋がったままである。脱臼してははずれた腕は、重く垂れ下がり、自由自在に動かすことも儘ならないが、そのことによりわれわれは腕の存在をありありと感じる。疲労における実存者も、脱臼のように、完全に切り離すことはできない自己を引きずりながら実存している。「疲労とは、実存のなかでの一実存者の浮上である」（*EE* p.51/66 頁）。疲労においては、このような遅れやずれによって実存者が浮上することで、実存者と実存との二重性が明らかになる。

以上で見たように、倦怠においては、責務の拒絶が実存の拒絶として現われ、拒絶する実存者と拒絶される実存としての二重化が明らかになった。また怠惰においては、行為を開始することの不可能性のなかに、実存を所有することの拒絶が含まれていることが明らかになり、これによって、実存を前にしながらも実存し始めることをためらっている実存者という二重化が示された。そして疲労においては、疲れきった実存者が実存を拒絶することで、実存から遅れ、実存者と実存との間にずれが生じ、それが二重化として明らかになった。いまや実存とは「実存者が実存する」という単純な事実ではなくなる。

実存するという事実は二重性である。実存には本質的に単純さが欠けている。自我はひとつの自己を所有しており、そこにみずからを反映させるだけでなく、それと伴侶あるいは相棒

のように関わっている。(EE pp.37-38/52 頁)

実存は自分自身という重みを背負っている。実存は純粹でまっすぐなものではありえず、屈折し、それ自身のうちでぬかるみにはまり、存在するという動詞のうちに「ひとは自らを存在する」という再帰動詞の性格を露呈させるのである(EE p.38/53 頁)。こうして、倦怠、怠惰、疲労の分析をとおして、実存における二重性が明らかにされ、それに伴い実存者に先立つ実存という次元が浮上する。

### 3 〈ある〉と基体化

世界のよそよそしさや無意味さに端を発しているように思われる〈ある〉という概念の発見は、無を思考することから始まり、純粹な無の根底に存在を認めることによって成就される。レヴィナスは、あらゆる存在が無へ回帰した状態を、「何か或るもの」はないが「何ごとかは起こっている」状態としてとらえ、無名で非人称的な存在一般と表現する。

非人称的で無名の、しかし消しがたい存在のこの「焼尽」、無の奥底でざわめきたてるこの焼尽を、私たちは〈ある〉という言葉で書き留める。〈ある〉は人称的形態をとるのを拒むという点において、「存在一般」である。(EE pp.93-94/122 頁)

〈ある〉は現代絵画に代表されるような芸術作品のうちに見出され(EE pp.90-92/120-121 頁)、夜の経験として具体化されている(EE pp.94-96/123-125 頁)。たとえば、夜の闇においては形あるものはすべて闇の中に消え去ってしまい、対象となるようなものは何も現前しないが、夜や闇といった存在の充溢のようなものはある。言い換えれば、夜においては無がある。だが、無があると表現することで、無は存在に回帰してしまう。

〈ある〉という存在を根底に置くことで存在の否定そのものが不可能となるため、無を存在の否定として特徴づけることはできない。ここから、ハイデガーが述べた無の不安に対置される〈ある〉の恐怖が浮かび上がってくる。レヴィナスが述べているように、〈ある〉における恐怖とは、存在の否定としての無すなわち死ではなく、存在から抜け出すことができず死ぬこともできないという存在への繫縛である(EE pp.102-103/131-133 頁)。したがって無は、レヴィナスにとって、存在から逃れることや、存在を全面的に否定することを可能にするものではない。とはいえ、無は無として現前する以上、〈ある〉ではない。無は無として現前するかぎり、すでに「何か」として存在してしまっており、「何ものでもない」ような存在一般ではない。こうして無は、存在の否定としても、〈ある〉としても規定されえず、〈ある〉における間、もしくは〈ある〉の中断として位置づけられる(EE p.105/135 頁)。

主体は、このような〈ある〉から引き離されることで生起しうる。〈ある〉における主体の生起を、レヴィナスは「基体化」[hypostase]という言葉で表現している。基体化についてレヴィナスは以下のように述べている。

実詞の出現を指示するために私たちは、哲学史において、動詞によって表現される行為が実詞によって示される存在となるその出来事を指し示していた、基体化という言葉をもたて採用することにした。(EE pp.140-141/174 頁)

基体化とは動詞から名詞への位相転換、すなわち動詞の実詞化である<sup>5)</sup>。「実詞」[substantif]とは、意味としては名詞とほぼ同じと考えてよいが、もとは実体を現わす名詞という意味として使用されていたことから、ここでは「実詞」という訳語を採用する<sup>6)</sup>。基体化によって、非人称的であるがゆえに名づけることのできない、純粋な動詞としての実存のさなかに、実詞が出現する(EE p.140/173 頁)。言い換えれば、基体化とは〈ある〉の中断、〈ある〉という基底の上に存在が浮上すること、私的な領域の出現、名詞の出現である(EE p.141/174 頁)。基体化という語で、レヴィナスは〈ある〉における主語の出現と、その出現によって〈ある〉から非人称性が取り払われ主体が出現するようになる様を表現していると言える。このことはある程度、文法的に説明が可能であるように思われる。レヴィナスは以下のように述べている。

基体化によって、無名の存在は〈ある〉としての性格を失う。存在者——存在するもの——は、存在するという動詞の主語であり、そのことによって、存在者の属詞にされた存在の運命に支配を及ぼす。(EE p.141/175 頁)

il y a は非人称構文なので形式上の主語である il は非人称主語である。直訳すると「それ（非人称）がそこで持つ」ということになるが、通常は il y a の後に名詞を置いて、存在を表現する「～がある」という意味で使用される。つまり、il y a の後ろに名詞が出現することにより、非人称主語による所有の意味から当の名詞が存在するという意味に変わる。名詞は、その文の意味上の主語 [sujet]、その文の主体 [sujet] となるのだ<sup>7)</sup>。

このように考えると、基体化が存在者による存在の支配であるということが、名詞による動詞の支配、意味上の主語による il y a 構文の支配であるというように理解できる。基体化によって示されることは、存在を引き受ける誰かが実存しているということであり、存在はその誰かに引き受けられることで、その誰かの存在となるということである(EE p.141/175 頁)。したがって、基体化によって示されるのは、純粋な動詞が名詞となって現われるようになるということだけでなく、非人称的で匿名的な何ものでもなかったものから、人称的で名前を持った何か或るものが出現するという出来事であると考えられる。

基体化という言葉について、その語源的意味に遡って少し考えてみたい。hypostase という語については、『実存から実存者へ』の訳注において、その語源から成立そして消滅に至るまでの込み入った歴史が、神学および哲学的観点から詳述されている（*EE* 204-213 頁）。レヴィナスが hypostase という語にその歴史的背景をどの程度含ませているかを明確に知ることは難しいが、hypostase という語が含み持つ意味についていくつか示唆することはできる。

レヴィナスが用いる hypostase という語の意味について坂口ふみは、とりわけ hypostase という言葉の持つ、液体の中の沈殿物、濃いスープ、膿といった、「液体と固体の間のようなどろどろしたもの」<sup>8)</sup> という意味との関連を指摘している。「沈殿とは流動的な液体が固体化したもの」であり、「レヴィナスが使うイポスターズにも、この「液体の中に固体が現われてくる」というイメージは生きている」と述べている<sup>9)</sup>。

たしかに、無名の存在一般から実存者が現われてくる様子は、このような沈殿物としてのイメージに合致するように思われる。粒子が水中を舞っているような状態は、〈ある〉の「ざわめき」[bruissement]（*EE* p.109/141 頁）に比することができるだろう。また、粒子が徐々に底に沈殿していく有様は、ざわめきが止んで休息に入るような状態として捉えられる。

hypostase の語源的意味に照らして、実存者を液体と固体の中間に位置するものとして捉えているような記述を、レヴィナスのテキストの中に明瞭な形で見出すことは難しいが、そうしたイメージを想起させるような記述であれば確認することができる。例えば、基体化の瞬間における諸存在は「いまだ運動でありながらすでに実体である」（*EE* p.169/216 頁）と言われ、運動でありつつ実体であるという曖昧な形で存在していることが示されている。また、〈ある〉をヘラクレイトスにおける「流れ」[fleuve] になぞらえている箇所では（*TA* p.28/17 頁）<sup>10)</sup>、〈ある〉と液体というイメージが重なり合っているように思われる。だが、このような hypostase 解釈の真偽をここで十分に問うことはできない。

#### 4 現在

〈ある〉から主体が基体化するためには、〈ある〉から引き離されることが必要とされる。不断の〈ある〉から離れるためにレヴィナスが必要とするのは停止である。停止は、間や中断としての無によって〈ある〉のなかに導入される。レヴィナスはこのような無を基体化の条件であると考え（*IYA* p.154/299 頁）。無は「休息」[repos] として主体の定位に関わる。休息は、実存者の本質的な行為であるとされる。レヴィナスは休息に、土の上に身を置くという行為、すなわち維持のための緊張そのもの、この成就という性格を与え、休息を実存者の基本的な活動、基礎、条件であると考え。このような休息によって、実存者が浮上してくるのである（*EE* p.52/67 頁）。

夜の例に立ち返るならば、休息は眠りとして記述されうる。意識は、〈ある〉という不眠の夜

における眠りである。意識は〈ある〉の不眠の中断、眠りの可能性（*EE* p.115/145 頁）であり、〈ある〉から自己のうちに引き籠もるための避難所を持つ可能性（*EE* p.110/142 頁）である。意識は眠りによってここ、すなわち了解にも地平にも時間にも先立つ（*EE* p.121-122/152-153 頁）自らの条件であるような土台を所有しているのだ（*EE* p.120/151 頁）。主体がそこに拠って立つような土台を有することで、眠りは存在を破滅させることなく中断する（*EE* p.120/151 頁）。

疲労と怠惰の分析で見たように、実存し始めることのうちには所有が含まれており、その所有は実存という重荷として立ち現われた。休息や眠りといった停止の中にも、ここという土台の所有が含まれている。だが、前者がそこから逃げ出したいくなるような重荷であったのとは異なり、後者の所有は自分の手を塞いでしまうような厄介な所有ではなく、ここに存在するという条件となるような所有であり、自己を塞ぐことのない唯一の所有である（*EE* p.120/151 頁）。

主体の基体化の条件であるような所有を含む停止は、現在という瞬間の自己準拠を可能にする。「瞬間」[instant] という語には停止という意味が含まれている<sup>11)</sup>。『実存から実存者へ』に先立って発表された論文「ある」<sup>12)</sup>では、「存在一般は、或る反転によって、瞬間である出来事によって、[……]「存在者」の存在となるのではないか」（*IYA* p.145/214-215 頁）と示唆されている。同様に、『実存から実存者へ』においても、「存在一般は、或る反転によって、[……]現在である出来事によって、[……]「存在者」の存在となるのではないか」（*EE* p.18/24 頁）と記述されている。ここからわかるように、論文「ある」のころから、レヴィナスはすでに基体化には瞬間が必要であることに気づいていた。さらに、「瞬間である出来事」という表現から、「現在である出来事」という表現へ変化していることから、瞬間は『実存から実存者へ』ではさらに現在という瞬間へと先鋭化されていると考えられる。こうして、存在一般が存在者の存在となるために、現在が必要とされる。

『実存から実存者へ』において現在は基体化と密接に関係づけられている。

現在の漸消は、その主体性の、つまり存在するという純粋な出来事のさなかに起こる出来事から実詞への転換の、すなわち基体化の、代価である。時間それ自体は、いかなる基体化も受けつけない。[……]しかし現在は、瞬間に名を与えてそれを実詞として思考しようような、例外的な状況をつくり出すのだ。それも言語の濫用によってなどではなく、存在論的な転換、ある本質的な両義性の力によって。（*EE* pp.125-126/157 頁）

現在の漸消が基体化の代価であるとはどういうことか。現在の基体化とは、何ものでもない存在一般の中から瞬間が立ち上がり現在と名づけられ現前することであると考えられる。だが、一般的に現在は現前しない。というのも、現在は消え去ってゆくものだからだ。レヴィナスが述べているように、現在の概念のうちに現在の漸消と自失が含まれているがゆえに、現在はいかなる継続性も持ちえない（*EE* p.125/157 頁）。だが逆に言えば、現在は漸消によって現前する



と言うことも可能である。すなわち、現在の漸消とは現在の現前の、現在の基体化の代価であると言うことができるのではないか。

瞬間の漸消は、瞬間の現前そのものなのである。その漸消こそが、存在との接触の充溢を条件づけており、この充溢はいかなる意味でも習慣<sup>13)</sup>ではなく、過去から受け継がれたものでもなく、まさに現在なのである。(EE p.132/164 頁)

瞬間の漸消によって瞬間は現前し、存在との接触の充溢が条件づけられる。レヴィナスはこのような現在に、瞬間と存在との関係から接近する。レヴィナスは瞬間が他の諸瞬間と関係する以前からすでに実存との例外的な関係を持っていると論じ、その関係の逆説的な性格について以下のように述べる。

存在し始めるものはその始まり以前には実存しない。にもかかわらず、みずからの始まりによって自己自身へと生まれ出、どこから発したということもなく自己へと到来することになるものは、その実存しないものなのだ。この始まりの逆説、それが〈瞬間〉を構成している。このことを強調しておくべきだろう。始まりは、始まりに先立つ瞬間から出発するのではない。始まりの起点は跳ね返りのように到達点に含まれている。(EE pp.130-131/163 頁)

レヴィナスは他の諸瞬間とは関係しない瞬間のあり方に共感を示す一方で、瞬間はあらゆる瞬間との関係に先立って、実存を獲得するという行為を内包しており、それ自体で関係であり、征服であると述べる(EE p.130/162 頁)。瞬間は、始まりであり誕生であることによって実存との例外的な関係を結び、現在という比類ない瞬間となる(EE p.130/162 頁)。現在とはこのように、存在とあらかじめ例外的に関係しているということである。レヴィナスはここで現在を、持続のなかで捉えられる現在や、過去や未来に準拠するような現在から区別しようとしている。レヴィナスが提示する現在は、絶対性を持ち自己準拠的なあり方をしている。したがって、現在の漸消は存在との関わり合いの絶対性を可能にし(EE pp.132-133/165 頁)、現在の漸消のために存在は決して相続されず、つねに力づくで勝ち取られる(EE p.133/166 頁)。

それ自身から発して存在すること。存在の瞬間にとってのこのような仕方、それが現在であるということだ。現在とは歴史を知らないことである。現在のうちで、時間ないし永遠の無限性は中断され、そして再開される。したがって現在とは、ただ存在一般だけがあるのではなく、ひとつの存在が、ひとつの主体があるような、存在における一状況なのである。(EE p.125/156 頁)

現在は停止といわれる(EE p.126/157 頁)。停止としての現在において、持続は中断され、再び

結び直される（*EE* p.126/157 頁）。したがって現在は自己以外の何ものにも依拠していない。このような自己準拠的な現在においてひとつの主体が生じる。このことは、休息としての定位は現在としての瞬間そのもの（*EE* p.124/156 頁）であると言われていることから明らかである。現在としての停止とは定位であり、そこで主体が生じる場である。したがって現在において生じる主体は、現在と運命をともにしており、現在とだけ関係していると言える。

このように現在が持続から際立たせられるのは、レヴィナスがラヴェルにおける「現在の復権」に影響を受けているからではないかという指摘もある<sup>14)</sup>。現在を特権化する理由をレヴィナス自身の言葉のうちに探すと、それは、生成変化の主体でありながらも不動のものとしてとどまり続けることのないような主体を打ち出そうとしているからであると考えられる。そのためには、現在はそれ自身から発して存在することが必要なのだ（*EE* pp.168-169/215-216 頁）。

現在は「純粋な自己準拠」（*EE* p.150/183 頁）であるとともに、現在という瞬間の持続からの解放つまり自由が示される。だが逆に言えば、この自由は現在が自己自身へ縛りつけられているということを示している。現在の自己準拠的な自由は、現在を自己同一化のなかに閉じ込める（*EE* p.135/167-168 頁）。現在のうちの始まりを受け容れる存在だけが、自分自身を背負い込む。自己準拠、自己と関わり合うということは、〈ある〉からの解放すなわち自由でもあるが、自己繫縛、自己捕囚でもある。自由な存在だけがすでに不自由なのだ（*EE* p.135/168 頁）。

## 5 主体における孤独と〈ある〉への回帰可能性

以上で見たように、基体化によって生じた実存者は解放と繫縛、すなわち自由と不自由という両義性を抱えている。実存者は、実存から逃げるように出発し、自己のうちに引き籠もり、存在一般のさなかで主体として定位するが、定位した途端に逃げ込んだ先の避難所であるはずの自己に縛りつけられ、拘束されてしまうのだ。このような主体の自己同一性は、孤独として捉え直される。孤独は「実存者と実存者が実存するという活動との間の解消しえない統一性」（*TA* p.22/10 頁）である。主体は孤独であるがゆえに「一者」（l'un）である（*TA* p.35/26 頁）。レヴィナスは孤独を、たんに絶望や放棄として捉えているのではない。孤独は実存することに対する実存者の支配、至上権であり（*TA* p.36/28 頁）、〈ある〉のなかに実存者が実存するために必要とされる（*TA* p.35/26 頁）。このことから、孤独は雄々しさ、誇りとして特徴づけられる（*TA* p.35/26 頁）。

孤独における実存者の至上権は、決定性の様相として理解される（*EE* p.144/178 頁）。「決定性」[définitif]とは、「私の実存それ自体の決定性」であり、「私が永続的に私自身とともにあるという事実」のことだ（*EE* p.144/178 頁）。すなわち決定性とは、私が片足を取られるようにして自分自身に繋がれているということであり、私が引き受けた実存に私は永続的に繫縛されているということ、つまり自我は自己以外ではありえないという不可能性である（*EE* p.143/177

頁)。こうした孤独における決定性は、疲労の分析で脱臼として表現されていた実存者のあり方においてすでに垣間見えていたものである。決定性は、自己の存在に釘付けにされているという自我の根本的な悲劇である (*EE* p.143/177 頁)<sup>15)</sup>。ゆえに孤独とは悲劇である (*TA* p.38/30-31 頁)。

孤独という悲劇を構成する実存者の決定性、それが「物質性」[matérialité]である。レヴィナスは物質性について以下のように述べている。

物質性とは、身体という墓場ないし牢獄への精神の偶発的な失墜を表わしているのではない。それは、実存者としての自由における主体の浮上に——必然的に——伴っている。( *TA* p.37/30 頁)

物質性は、実存者の浮上にとまとうということから、主体が定位する場である基体化において捉えられなければならない。基体化は〈ある〉という物質の塊のような場で生じる出来事であった。そこから物質化するということは、〈ある〉に必然的に結びつけられているということだ。〈ある〉には、死をも凌駕する強烈な回帰性があった。したがって、〈ある〉から基体化する主体は、いずれ〈ある〉に回帰してしまう可能性を持ちつづけることになる。よって物質性の悲劇とは、〈ある〉に由来する悲劇なのだと言える。実存者は実存することを身体化する。だがそのことによって、実存者は自己同一性という悲劇的な自己繫縛へと陥ってしまう。実存者が自己から離脱しえないという事実、それが実存者定立の代償なのだ (*TA* p.36/28 頁)。

再び現在に話を戻してみると、現在もやはり〈ある〉へ回帰してしまう可能性を秘めている。「現在は存在に従属している。存在にかしずいているのだ」(*EE* p.134/167 頁)。瞬間のうちでも〈ある〉の仮借なさや無限性は完遂されてしまう。現在が〈ある〉から解放されるためには、そして、実存者が自分自身との自己同一性から解放されるためには、時間が必要とされる。

レヴィナスは後に、存在とは別の次元に赴くことを主要なテーマとして展開するようになるが、『実存から実存者へ』における現在の分析においてすでにこのテーマは萌芽している。それは、レヴィナスが主体の解放に向けて、あらためて時間を要請する場面において見出される。

存在の〈人称性〉とは、存在がみずからを〈他なるもの〉として再開させる瞬間そのものにおける、奇跡的な繁殖性を必要としているかのようにして、時間を必要としているということ自体なのである。( *EE* p.159/194 頁)

レヴィナスは主体を現在と関係づけることで自己繫縛へと陥らせたが、今度はそこから主体を解放させるために時間を要請する。だが、単独の現在だけではみずからを〈他なるもの〉として再開させることはできない。時間は現在という主体とは別の場所からやってこなければなら

ない。とはいえ、レヴィナスは現在のうちに主体の死と再生を位置づけており、その再生はすでに存在とは別の場所へ方向づけられている。すなわち、再開において〈私〉は、「たんなる「転地」ではなく、「自己のうちとは違うところ」でありながら、かといって〈私〉は非人称の境地にも永遠の境地にも落ち込むことはない」ような〈他所〉に開かれる（*EE* p.157/192 頁）。主体は現在において死ぬことで〈ある〉から解放されることを望み、再生することによって〈ある〉とは別の場所を模索しているのである。

## 6 おわりに

本論考では、〈ある〉という目眩をひきおこすような終わりなき存在と、そこから生じる主体について見てきた。主体は〈ある〉から基体化し、そのような始まりも終わりもない無限の網目に生じる裂け目として現前するが、現前することによって再び存在に絡めとられてしまう。すでに実存してしまっている主体は、倦怠や怠惰において見られたように存在することを拒絶することはもはやできない。主体はすでに実存し始めており、疲労の分析で示された脱臼状態におけるように、決して切り離されることのない存在という重荷を引きずりながら実存している。主体は存在しているというよりも、むしろ存在させられている。

〈ある〉は、『実存から実存者へ』において、そこから主体が基体化する磁場のようなものとして位置づけられているが、同時に、実存者の定位を突き崩しうるような存在一般という性格も持ち合わせている。hypostase の語源的意味である沈殿物も、気をゆるせば〈液体〉へと回帰してしまう危うさを抱えている。主体は現在の持つ自己準拠という働きによって個体化されるが、その背後にはつねに〈ある〉という深淵がつきまとっている。よって、〈ある〉から基体化した主体は、つねに〈ある〉へ雲散霧消しうる悲劇的な可能性を抱えた主体であると言える。

このような主体から生あるいは死へ向けられた真摯な態度を導き出すことはできるのだろうか。『実存から実存者へ』においては、実存することだけでなく実存することを拒むことにも疲れ、ただ漫然と存在しているような主体の姿が浮かび上がってくるように思われる。レヴィナスの他者の哲学は、力強い意志も希望も失ってしまい疲弊した主体が、力なく他者を希求することから始まるのではないだろうか。こうした観点から、「他者のための一者」としての主体を再考する必要があるように思われる。

### <注>

※レヴィナスの著作については以下の略号を使用し、初出年は（ ）で示した。引用の際には既存の邦訳を参考にしたが、適宜変更した箇所もある。頁数については、スラッシュ〔 / 〕の後に邦訳の頁数を記した。

*EE: De l'existence à l'existant* (1947), Paris: Vrin, 2004. (『実存から実存者へ』西谷修訳、ちくま学芸文庫、2005年所収)

TA: *Le temps et l'autre* (1947/1979), Paris: PUF, 2007. (『時間と他者』原田佳彦訳、法政大学出版局、1986年)

IYA: «Il y a», *Deucalion*, n°1, 1946, pp.141-154. (「ある」、『レヴィナスコレクション』合田正人編・訳、ちくま学芸文庫、1999年、211-230頁)

- 1) レヴィナスはハイデガーの Sein〔存在〕と Seiendes〔存在者〕を、être〔存在〕と étant〔存在者〕とはせず、口調の理由から exister と existant と訳している (TA p.24/11 頁)。なぜレヴィナスが Sein の訳語として être ではなく exister を選んだかについては、être では動詞の存在と基体化した存在、つまり「存在すること」という動詞が名詞化した存在とを区別できないということにあると思われる。つまり、存在すること (動詞) / 存在 (動詞が名詞化したもの) / 存在者は、ドイツ語では sein / Sein / Seiendes となるが、フランス語では être / être / étant となる。だが exister ならば、exister / existence / existant と書き分けることができる。のちに『存在とは別の仕方では』においてレヴィナスは動詞としての存在を表わす語として essence を採用し、être / essence / étant という書き分けに成功している。『実存から実存者』訳注でも同様の見方がされている (EE 31 頁)。
- 2) 小手川によれば、『実存から実存者へ』で取り上げられる諸経験は、ハイデガーが『存在と時間』において〈世界内存在〉の「欠損的諸様態」として特徴づけた、「中止」〔Unterlassen〕、「怠惰」〔Versäumen〕、「断念」〔Verzichten〕、「休息」〔Ausruhen〕から取り上げられたものであるが、レヴィナスはこれらを欠損的ないし副次的であるとは見なさず、「もの」としての身体性を垣間見させる契機として考えている (小手川正二郎『甦るレヴィナス——『全体性と無限』読解』、水声社、2015年、95頁)。
- 3) 「ウィリアム・ジェームズの有名な例におけるように、怠惰は起き上がるという明らかな義務と、ベッド・マットの上に足を置くこととの間に位置している」(EE p.33/47 頁)。
- 4) 疲労を倦怠と怠惰から分けて考える見方もある。馬場は、倦怠と怠惰を存在への繫縛を開示する情態性、疲労を存在の開示から隠蔽への移行する中間に位置する情態性として捉えている (馬場智一『倫理の他者——レヴィナスにおける異郷概念——』勁草書房、2012年、307-318頁)。
- 5) hypostase を動詞からの名詞化あるいは実詞化と捉え、『実存から実存者へ』では「実詞化」、『時間と他者』では「位相転換」と訳されている。
- 6) substantif が名詞という意味をもちつつも実詞と訳される理由としては、末松壽「ポール・ロワイヤルの『文法』および『論理学』における形容名詞」、『山口大学哲学研究』第6巻、山口大学哲学研究会、1997年、1-34頁が参考になる。末松によれば、20世紀以前、少なくとも古典時代には、フランスにおいて「形容名詞」〔adjectif〕と「実体名詞」〔substantif〕という二つの品詞が存在し、それらが「名詞」〔nom〕という上位の類を形成していた。このとき実体名詞は、実体ないし基体〔substance〕を意味していた。C. ランスロー、A. アルノー著、ポール・リーチ編序『ポール・ロワイヤル文法 (一般・理性文法)』南館英孝訳、大修館書店、1972年、37-41頁も参照。
- 7) したがって、il y a が名詞すなわち存在者の出現とともに存在の意味を帯び始めるならば、名詞のない il y a 単体にはまだ存在者はおらず、存在という意味もないため、〈ある〉と訳するのは時期尚早なのではないかと考えることもできる。
- 8) 坂口ふみ『〈個〉の誕生——キリスト教教理をつくった人びと』岩波書店、1996年、116頁。
- 9) 同上。同様の見方をしているものとして、岩田靖夫「レヴィナスにおける死と時間——ハイデガーとの対比において」、『思想』861号、岩波書店、1996年、34-35頁があげられる。
- 10) ただし、ここで引き合いに出されているヘラクレイトスの流れとは、「ただの一度として浸ることのできない流れ〔……〕すなわち、統一性という固定性そのもの、すべての実存者の形式が成り立ち得ない流れ、生成ということがそれとの関係によって理解されるところの固定性の最後の要素まで消え去る流れ」(TA p.28/17 頁) のことであり、ここに実存者が定位する余地があるかはわからない。
- 11) 『実存から実存者へ』序章の訳注 (3) 参照 (EE 32-33 頁)。
- 12) IYA は、多少の異同はあるものの、ほぼ EE の pp.15-18、pp.93-105 と対応する。
- 13) 「瞬間を他の諸々の瞬間との関係でとらえるという私たちの習慣」(EE p.128/160 頁)。
- 14) レヴィナスのこのような現在の考え方はルイ・ラヴェルから影響を受けているという見方もある。Joëlle Hansel, «Autrement que Heidegger : Levinas et l'ontologie à la française», coordonné par Joëlle Hansel, *Levinas. De l'Être à l'Autre*, Paris, PUF, 2006, pp.45-53.
- 15) 孤独を構成する繫縛の「決定的」という性格に、レヴィナスはヒトラー主義の哲学を見ているという指摘もある。渡名喜庸哲『『全体性と無限』におけるピオス——クルト・シリングの注から出発して』、合田正人編『顔とその彼方——レヴィナス『全体性と無限』のプリズム』、知泉書館、2014年、164頁。

主指導教員 (宮崎裕助准教授)、副指導教員 (栗原隆教授・番場俊准教授)